



172号
2012/4/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp
◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。



「窑洞のある風景」（陕西省 桂縣から米脂に向かう途中） 2001年10月16日 撮影:木村武司

‘わんりい’ 172号の主な目次

北京雑感(63)北京の住宅事情……………	2
私の調べた諺・慣用句8「馬を指して鹿という」……	3
媛媛讲故事(42)「竇娥の冤罪」……………	4
松本杏花さんの俳句集「千里同風」より……………	5
四姑娘山写真だより26「女王谷の春節行事」……………	6
‘わんりい’活動報告「第7回漢詩の会」……………	8
中国・城市めぐり(14) 長春市Ⅱ……………	9
スリランカ紹介(56)植物園・そのⅢ……………	12
読む(番外)「日本という国で子育てをすること」……	13
アフリカの日々(61)「頼みごと天国」……………	14
‘わんりい’活動報告「生チョコとクッキー(3種)の会」…	15
私の四川省一人旅(54)草原の中の街・塔公Ⅳ……………	16
‘わんりい’掲示板Ⅰ……………	19
‘わんりい’掲示板Ⅱ……………	20

【表紙写真説明】

丹羽朋子氏の黄土高原シリーズに引き続き、黄土高原の写真をご覧頂きたいと思っております。写真は10年以上も前のものですが、私が初めて訪れた黄土高原は、同じ中国国内であっても大都市の生活からかけ離れ、自然と人間とが調和している、素朴な風景を垣間見ることが出来る場所でした。窑洞風景のごく一部ですがご覧ください。

黄土高原と言う様に、独特の黄色土の大自然の中に、勾配のきつい崖の様な自然の場所に道を作り、家を作り、作物を作り、花を植え、自然に溶け込んで人々が生活をしている。人間のたくましさを感じる。原画は縦位置である。桂縣から米脂に向かう途中の窑洞ある風景を表現するには、海や湖と異なり上下の縦位置でその生活の凄さを表現できるものと考えているが、表紙の関係上、上下をカットして横位置の写真とした。 (木村武司)

北京の街並みが絶えず変化するというのは、毎年のように北京を訪問する旅行者の一致した感想です。旅行者のみならず、2,3年北京を離れた、生粋の北京っ子ですら案内が必要になるほどです。一年に6ヶ月だけ北京に滞在していた私が、4年ほど日本に留学して帰国した北京っ子の友人に、新しいバス路線や、最寄の地下鉄の駅を教えたことがあります。他の街ではなかなか出来ない経験でした。

街並みや交通機関の変化は、以前の情報を頼りに行動する我々を途方に暮れさせますが、それはあくまで一過性のもので、直ぐに馴れて、その結果を「味気無くなった」とか、「便利になった」とか勝手な感想を土産話として携えて帰って行きます。しかし、そこに住む北京の人々は、この変化をどう受け止めているのでしょうか。あまり深く立ち入って話を聞いたことはありませんが、街並みの変化については、綺麗になった、便利になったと概ね肯定的に受け止めているようです。ただ、中国はこの10年ほどの間に経済や社会秩序が激変していますから、北京に暮らす人々の生活にも大きな変化が生じ、不平や不満も少なくないようですが、外国人には余りよく分かりません。

そんな北京の人々の生活で、外国人が見るとちょっと面白い(と言っては中国の方々に失礼ですが)現象を垣間見ることが出来たので、それをお話しましょう。北京の人々の住宅事情です。

私の友人のご両親は、大学の先生でした。お父様は15年程前に亡くなられ、お母様は20年程前に退職されましたが、今も大学構内のお宅で独り暮らしをしておられます。お宅は30年以上前に大学から買ったもので、大学構内の中でも、郵便局や銀行、スーパーや市場に近くて、とても便利なお宅にあります。それでいて、鬱蒼とした森の中にいるようで、毎朝、カッコウの鳴き声や、キツツキのドラミングで目覚めることが出来る素晴らしい環境です。

建物はレンガ造りの5階建てで、20棟程をフェンスで囲んで小区とし、そこへの出入りは2箇所の門だけで、1箇所は朝6時から夜10時までしか通れず、もう一つの門は24時間開いています。守衛さんが常駐しています。本来は大学教職員の住宅として建てたものなのですが、現在はこの方のように、退職された方々が多く住んでいます。それで、新任の若い先生方は学内に宿舍を得ることが出来ず、外から通勤して来ている方も随分おられます。

大学としては、これら住宅を取壊して新しい高層住宅を建てたいのですが、現在住んでおられる方々は皆さん、住宅の所有者で追い出すわけにはいきません。郊外に広くて近代的な施設を完備した住宅を用意して、この方々に有利な条件を提示して移住するよう説得するのですが、学内は安全だし、生活に便利だし、長年住み慣れているので、移住に同意する方は少なく、建替えの準備は遅々として進みません。大学は仕方なく、お隣の大学と共同で近くに高層の教職員用住宅を建設して当座間に合わせています。

このような現象は、都心に近い住宅ほど顕著で、一度知人に会いに訪れた復興門付近にある北京放送の宿舎でも同じような様子でした。定年で退職されたお年寄りばかりでなく、途中で転職された方もそのまま住み続け、そこから新しい職場に通う人もかなりいます。中には、子供が郊外にマンションを買って、都心の住宅の所有者である親御さんをそこに住ませ、子供が都心の住宅から違う会社に通勤している家族もありました。

本来は、隣接する機関の職員のための住宅だったのに、現在そこで働く人の居住する割合が極端に少ないのは、居住者にその住居を分譲したことが原因となっています。日本で言えば、工場・事務所の敷地内にある社宅を分譲するようなもので、ちょっと考えられない事態ですが、中国の場合、土地は国家のもので、建物の所有権と言うより使用権と言ったほうがいいのかも知れません。もちろん部屋の内装やベランダの改造等は自由です。しかし、この所有権は一代限りのもので、他人への譲渡は勿論、親族への移譲も出来ません。ですから、分譲当時、現在のようない状況になるとは予想出来なかったのでしょう。

当時の中国は、職場のほとんどが国営で、就職先も共産党が指定していましたし、一旦就職すれば特殊な場合を除き、転職など考えられませんでした。しかも親は年齢が高くなって退職すれば、子供たちと一緒に暮らすのが普通でしたから、住宅は企業が買い戻し、新しい社員に使用させる計画だったのです。ところが、その後の中国社会の変革で、住宅などを用意しない私営企業に転職する人が増え、何よりも親子が別々に居を構えることが多くなったので、企業を退職してもその中に所有する住宅に住み続けるケースが多くなりました。しかも、人々の権利意識が高まって、所有者が存命中は、権利をとことん利用しようとする人も多く、この職場と住居の奇妙なモザイク模様の解消には暫く時間がかかると思われます。

鹿を指して馬と言う

三澤 統

私の調べた諺・慣用句 8

今回未曾有の大災害を引き起こした「東日本大震災」が引き金となつての福島第一原発の事故は、日本各地に未曾有の被害をもたらしました。放射能によって、空気や海水を始めとして、動植物も広域にわたって汚染され、その結果人々は住む場所を奪われ、今も30万人以上の方が避難を余儀なくされています。また子供たちの健康にも将来の不安があります。

そもそも一度事故が起きればこんなにも危険で恐ろしい原発を国が安全だと言い張って、無理やり押し進めたことが原因と考えて良いでしょう。

このように間違いを、無理やりにおしとおそうとすることのたとえとして使われるのが、今回の諺「鹿を指して馬と言う」です。

辞書を確認しますと、

▲現代国語(三省堂):「鹿を指して馬という」まちがいを、無理やりにおしとおそうとすることのたとえ。(類語 さぎを、からすと言いくるめる)」

▲中日辞典(小学館):「zhǐ lù wéi mǎ 指鹿为马 シカを指してウマと言う。是非を転倒する。秦の丞相趙高¹⁾が謀反をたくらみ、群臣を試すため二世皇帝にシカを見せてこれはウマだと言った。二世は側にいる臣下に丞相がシカをウマだといったが間違いではないかと尋ねたところ、臣下のある者はウマだといい、ある者はシカだと答えた。シカだと答えた者はあとで全部趙高によって殺害されたという故事から。日本語の「馬鹿」はこの故事から出ているとの説もある」

と、それぞれ記されています。



中日辞典で、由来がほぼ説明されていますが、もう少し詳しく見てみましょう。

出自は「史記²⁾・秦始皇本紀」の、

「趙高欲为乱，恐群臣不听，乃先设验，持鹿献于二世，曰：“马也”。二世笑曰：“丞相误邪？谓鹿为马”」（趙高は、謀反を企んでいたが、群臣が服従してくれるか心配なので、服従の有無を確かめようと計画し、鹿を秦二世に献上し、“これは馬です”と言うと、二世は笑って”丞相、間違いであろう、鹿を馬と言うのか”）の部分です。

秦の始皇帝の死後、宦官の趙高は大臣の李^{りざん}と諮って遺書を偽造し、始皇帝の末の皇子・胡亥を即位させました。秦二世(胡亥)は趙高を郎中令に任じました。趙高はその後



イラスト：叶霖 (Ye Lin)

李斬を殺害し、自分が大臣になりました。それでもまだ満足せず、最上位の皇位を望んでいたのです。

彼は朝廷の大臣達が自分にどれだけの服従心があるのかを調べるために、ある方法を試してみようと思いつきました。

ある日、彼は一匹の立派な鹿を曳いて朝廷に上がり、言いました。「これは私が陛下に差し上げるためにお持ちした一匹の駿馬でございます」すると秦二世は笑って言いました。「大臣、どうしたのだ。これは紛れも無く鹿ではないか。それでも鹿を馬と言うのか。」趙高は「これは正しく馬であつて鹿ではありません。お疑いでしたらこの場で大臣達に証明させましょう」と言い終ると、威嚇の眼光鋭く、群臣たちを睨みつけながら言いました。「これは間違いなく馬である、皆もそう思うであろう？」

それを聞いて、ある大臣は趙高の怒りを恐れて、本心とは逆に「それは確かに馬です」と言い、ある大臣は、うそは吐きたくないの、「それは馬ではなく鹿です」と本当のことを言いました。秦二世はだんだん訳が分からなくなって、自分の目がどうかしてしまったのかと思いました。

趙高は自分に服従せず、「鹿です」と本当のことを言った大臣を覚えておいて、後日あらゆる計略を以つて彼らに迫害を加え、終いには皆監獄に閉じ込めてしまいました。酷い目にあつた大臣達は趙高のことを大変恨みそして恐れしました。このように強行な手段を用いて、無理やり事実とは反対のことを押し進めることは、国家の歴史上に数多く有つて、これはほんの一例なのです。

〈注記〉

1) 趙高(? ~紀元前207年): 戦国時代末期から秦にかけての宦官、政治家。(ウィキペディアより)

2) 『史記』: 中国前漢の武帝の時代に司馬遷によって編纂された中国の歴史書である。正史の第一に数えられる。二十四史のひとつ。(ウィキペディアより)

元代(1206～1368)の初め頃、寶という書生がいました。都に出て科挙の試験に挑戦して、出世の機会にしたいと思いましたが、生活が貧しく、都に上る費用がありませんでした。妻は四年前に亡くなり、七歳になる、端雲という娘がいました。

或る時、生活をどうしても維持できなくなり、仕方なく同じ町に住む蔡婆という高利貸に20両の銀を借りました。一年を経ても返せなかったため、借金は40両になってしまいました。しかし、蔡婆はそのお金の返済を催促しませんでした。実は蔡婆には八歳になる息子と二人だけで暮らしていたのですが、日頃から寶さんの娘がとても気に入っていたからです。

蔡婆は願いました。

「端雲は、まだ七歳になったばかりだけれど、心が優しく、利口だし、家事もいろいろよく出来る。うちの息子の嫁になって貰えたらいいなあ」と。

中国では、古くから、「童養嫁」という習わしがあります。将来息子の嫁にするため、女の子を子供の時から、金品と引き換えに引き取り、息子の面倒を見させたり、家事の手伝いをさせたりして、二人が成人してから挙式を行うという風習です。

蔡婆は寶に言いました。

「端雲のことがとても気に入っているの。息子の嫁になってくれれば、40両のお金はもう返さなくてもよいわ」

寶はそれを聞いて考えました。もし娘が蔡婆の息子の嫁さんになれば、食べ物も、着るものにも娘は悩むことがなくなります。もっと嬉しいことは、40両のお金を返さないで済めば、自分の念願だった科挙受験の費用も解決することができるのです。

寶はいろいろ考えた末、思い切って蔡婆の提案に応じました。

「では、娘のことをぜひお願いします」

「ご安心ください。端雲の面倒はきつとよくみるわ」

蔡婆は嬉しく思っけて約束しました。

寶がいよいよ受験に向かう前、娘の端雲に「蔡婆の言うことをよくきくのだよ。父さんが出世したら、お前をきつと迎えにくるよ」と言い聞かせ、受験の旅に出かけました。

端雲は蔡婆の家に来ると、真面目に蔡婆に仕え、一

生懸命に家事を手伝い、蔡婆に大変喜ばれました。

けれども、二、三年後、戦乱が起こり、寶からの消息はないまま、蔡婆一家はもと住んでいたところから引っ越すことになり、蔡婆は端雲の名を寶娥と変えました。

息子が十七歳になった時、蔡婆は二人の結婚式を行いました。そして、寶が都に旅立ってから十三年経ちました。が、寶は帰って来ませんでした。蔡婆と寶娥と息子三人は、睦まじい平安な生活を送っていました。しかし、息子は体が弱く結婚して二年後亡くなり、家には女二人だけが残りました。

蔡婆からお金を借りている賽という男がいました。賽は、薬屋を経営していたのですが、品行の良くない人でした。

ある日、蔡婆は貸してあるお金を回収するため、一人で薬屋のところに行きました。ところが賽はお金を返したくない一心から、蔡婆を殺してしまおうと思いました。「一緒にお金を取りに行かないか」と言って、蔡婆を騙して寂しい林の中に連れ出しました。そしてやにわに蔡婆の首に縄を掛け絞め殺そうとした丁度その時に、二人の男にぶつかってしまいました。賽は吃驚して慌てて縄を捨てて逃げました。この二人の男は、親子してごろつきの無頼漢で、思いも寄らない事件に出会い蔡婆を救い出しました。蔡婆から詳しいいきさつを聞いた二人は、蔡婆が高利貸で、しかも家には男がはず、女性二人で住んでいることが分って、悪意を抱きました。

息子は父に目くばせをすると蔡婆に言いました。

「これは、なんという縁だ。おれと親父は二人の男、あなたと嫁は二人の女、二組の夫婦になれば、ちょうど良いではないか」

蔡婆はびっくりして、頭を振って

「それはできませんよ。危ないところを救って頂いてご恩をお返ししなければならいのですが、夫婦になることはできません。ご一緒に家へ戻り、お礼にお金を差し上げます」

と言いました。

息子は蔡婆に拒否されるやすぐに凶暴な顔つきになり、

「なんだって？ 応じられないというのか？ じゃあ、さっきあなたを殺そうとした薬屋の縄はまだおれの手にある。この縄であなたの首を絞めて殺してやろうか」

といいながら、縄で蔡婆の首に縄を掛けようとした。

少し前に危うく薬屋に殺されそうになったばかりというのに、今また同じような状況に直面し、蔡婆は怖ろしさに震えあがり、

「分った、殺さないでおくれ。兎に角家に一緒に帰りましょう」

とひとまず答えました。

家に帰ると、お酒や、美味しい食べ物で無頼漢の二人をもてなし、嫁の寶娥に事情を詳しく説明しました。

「母さん、それはとてもできないことですわ。ちょっと見ただけでも二人は良い人とは思えません。悪人を家に引き入れたら、きっと災いを招くでしょう。早く家から出て行ってもらいましょう」

寶娥が言いました。

しかし、蔡婆がお金をいくら出しても、いろいろ頼んでも、無頼漢の親子は、全く耳を傾けないばかりか、家から出て行こうとしません。無頼漢はそのまま蔡婆

の家に二、三日居続けました。

その間にも、無頼漢の息子は、チャンスがあれば、寶娥を手籠めにしようとしたのですが、気骨のしっかりした寶娥に却って厳しく叱られ、思い通りにはなりませんでした。遂に無頼漢の息子は寶娥を意のままにできない怒りのあまり、

「蔡婆を殺して、寶娥を一人にし、頼るものがなくなったら、言う通りなるかも知れない」

と考えました。そこで、蔡婆を殺そうとしていた薬屋の賽のことを思い出し、

「よし、良い策があった」

と賽を訪ねて行きました。

一方、賽は先日蔡婆を殺そうとしたところを人に見られてしまったのでびくびくしながら過ごして来ました。そんなところへ自分の悪行を見た人が訪ねて来たので大変吃驚しました。

「毒薬を配合してくれ！さもしなければ、お前を告発してやるぞ！」

と無頼漢は、賽が先日蔡婆を殺そうとしたときに使った縄を持ちだし、賽にみせると脅迫しました。

賽は告発されるのを恐れて、毒薬を配合してやりました。無頼漢が帰って行くと賽は遠くへ逃げて行きました。(続く)

松本杏花さんの俳句

qiān lǐ tóng fēng
「千里同風」より

桜しべ泥に塗れて還りけり

nèn jiāo yīnghuā ruǐ
嫩娇樱花蕊

fēngyǔ qīnxí mǎn níshuǐ
风雨侵袭满泥水

biàn huán chéng chén huī
变还成尘灰



季语：櫻化，春。

赏析：我国清朝诗人自珍在《己亥杂诗》中吟道“落红不是无情物，化作春泥更护花”。而此首俳句写的是花蕊粘泥终变土，形容物质不灭，万物往生，不难看出，二者文脉相同，存有异曲同工之妙！

花筏あはひに落とすビルの影

huābàn piáo sǎ sǎ
花瓣瓢洒洒

shùnsuǐliú tāng sī mù fǎ
顺水流畅似木筏

qíjiān yǐng lóu shà
其间映楼厦

季语：花筏，春。此喻花瓣散落在水面上顺水流洒，犹如木筏放流。

赏析：落花流水，红雨随心，好一幅阳春画卷！难能可贵的是，作者没有单纯写樱，而是全面地展现出了都市春景的宏大场面。本首俳句风格清丽，遣词工整，意境优美，描写生动，堪称秀句！



大晦日に囲炉裏端で厄除けの呪文を唱えながら松の枝を焚き煙で家を清めます。



正月3日、集落の人達が広場に集まって新年の挨拶を交わし、村対抗でバスケットボールや綱引きをして親睦を深めます。



正月元日、屋上で松の枝を焚いて狼煙を上げながら法螺貝を吹き新年の無事を祈ります。

農業暦の春節には女王谷（現在ギャロンと呼ばれる地域のチベット語の原名“rGyalmorong”の意識）の各地で伝統行事が開かれます。特に四姑娘山の西側下流に在る丹巴の伝統行事は古い文化を良く残しているため強く惹かれる物が有ります。この丹巴で今年撮影した春節の行事を写真でご紹介します。なお写真は無いですが、正月元日0時には集落の各家から連発の打上げ花火が一齐に上がり大変綺麗です。これは数年前から定着した新しい行事です。



集落で開かれるお祭りで厄払いする村人。ボン教僧侶に清水を松の枝を使って頭に振り掛けて貰ったり（写真左）、日本のどんど焼きに似た行事（写真右）、も行います。但し時期は小正月とは限らず集落によって異なります（ギャロンでは色々な時代に色々な部族が入り込んでいて歴史・言葉・民族衣装が少しずつ違います）。



女王谷はチベット文化圏に有るので農業暦の春節(今年は1月23日)よりもチベット暦の正月(今年は2月22日)に盛大な行事が有るのではないかとと思われる方がいらっしゃるかも知れません。チベット暦はお寺等で生きていて農耕を主とするギャロンの人達の意識にも有ります。お寺の開山や宗祖生誕を祝う時はチベット暦に拠りますが、農業暦の日や農家の仕事の都合を考慮して変わります。しかし他のお寺の法会や農家の行事は農業暦の立春や立夏等に行われる事が多いです。女王谷のチベット暦の正月ではほとんどの場合、お寺で小規模な法会が有ったり一部の農家で簡単な儀式を行う程度です。この状況は農耕を主としている事(四姑娘山麓で見られる半農半牧はギャロン全体で見ると少数派です)と250年前の金川戦役に関わりが有るようです。

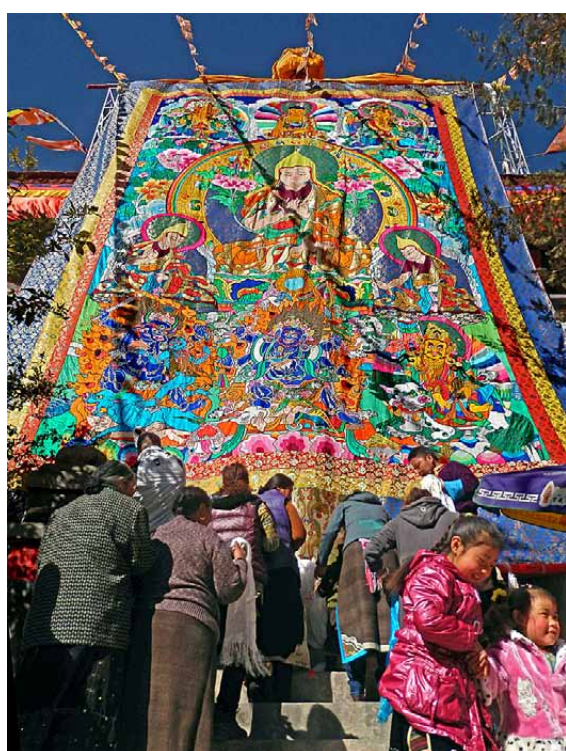
しかし同じ女王谷であっても高所でヤクの放牧を主とするアムド系の集落ではチベット暦の正月を祝う家が有るそうです。

日本の農家でも戦前は旧暦の正月を祝っていましたが今では廃れました。女王谷でもチベット暦から農業暦へ、やがては農業暦から太陽暦へ移行して行くのでしょう。

本題から外れますが、最近の状況について補足します。農業暦の春節に四川省奥地のチベット族自治区域で治安問題が発生して新聞TVでお騒がせしましたが、四姑娘山や丹巴は平穏です。現在のところ一般の外国人は入れなくなっていますが、5月からは大丈夫と聞いております。



上の写真3つは宗教的な踊り。女王谷ではボン教でもラマ教でもほとんど同じ踊りです。



ラマ寺で開帳した大きな仏画(タンカ)に参拝する村人。



- ↑ お寺のお祭りに集まった近在の村人。
- ↻ ラマ寺の本尊の観音像に参拝する村人。
- ⌚ 経文を頭を触れて貰って賢くなりますようにと祈る子供達。

大川健三：1950年生まれ。大手電気会社に勤務、特許、発明賞の受賞経歴を持つ。在職中は勤務先山岳部所属。2000年3月に退社、同年6月より中国四川省四姑娘山自然保護区管理局特別顧問として現地にて自然保護や写真撮影にあたっている。著書に「蜀山女神」「女王谷」(中国版)がある。

● 大川さんのホームページはこちら

▶ 蜀山女神、四姑娘

<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm>

▶ ヒマラヤ横断山脈の女王谷

<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvalley.htm>

◇ わんりい活動報告

第7回「漢詩の会」

日時：2012年3月18日

会場：まちだ中央公民館・視聴覚室

参加者：13名

第7回「漢詩の会」は、3月18日(日)、まちだ中央公民館6F視聴覚室で開催されました。

今回「わんりい」に挟み込んだ「漢詩の会」の案内に、講師の先生のお名前が抜けており、先生はもとより、関心を持ってくださった皆様にも大変失礼を致しました。講師は、前回と同じ桜美林大学名誉教授で孔子学院の講師の植田渥雄先生です。

今回準備した資料は、「江南の春」(杜牧)、「春暁」(孟浩然)、「風橋夜泊」(張継)、「廬山の瀑布を望む」(李白)、「春雪」(韓愈)の5編でしたが、3月18日は「江南の春」に絞っての講義を聞き、朗読の練習をしました。

講義では、杜牧が活躍した、既に盛唐の華やかさは陰りを見せている中唐末からみやびで洒脱な晩唐

(827～907年)の気風と、その気風を受けてこの詩に盛り込まれた江南(揚子江の南に広がる穀倉地帯)の春の、絵のような情景をお話し下さいました。また、漢詩作成上の平仄ひょうそくのお話なども加わり、平仄の規則を知る事で漢詩が持つ音楽性のゆえんなどが分かり、漢詩への興味を深めることができるかと思えます。

尚、朗読では、前回と同じく「高音と低音にメリハリを付ける」と共に、単語に含まれる音を分解してそれらの音を一つ一つきちんと発音する指導があり、中国語の語句の読みへの認識が新たになりました。

4月以降は「わんりい」の「漢詩の会」が目的としている、「読み下しでは味わえない、漢詩独特のリズムと音の美しさを味わう」に向かって、今回用意した馴染み深い漢詩の読みをご指導頂く予定になっています。

次回は4月8日(日)開催で、場所も時間も今回と同じです。(「わんりい」19p掲示板参照)

中国語を学んでいらっしゃる方もそうでない方も、ぜひ中国語での読みの楽しさを味わって頂けますように願っています。ご参加をお待ちしています。

歩き疲れたのでゆっくり昼食をとり休憩することになった。食後は、「偽満皇宮博物院」に行くことにした。この博物院にある日本語版のパンフレットを見ると、「偽満皇宮は、東北淪陥(占領されること)十四年史、偽満皇宮宮廷史及び東北人民抗戦史の研究センターであり、文物資料の所蔵・研究・展示センターである」と書かれている。この場所こそ溥儀が新宮殿(前述の地質宮)完成までの仮宮殿として執務し、生活していた皇宮である。つまり新宮殿は完成しなかったため、1932年から1945年の14年間仮宮殿で過ごしたわけである。

ここでこの「偽」という字について思ったことを率直に書いてみたい。辞書には ①にせの、②非合法の、と2つの意味が書かれており、②の例示として「偽政府」は日本語では傀儡政権とある。これからすると「偽満州国」は非合法の国、或いは傀儡政権の国という意味と受け取れる。たしかに満州国は、関東軍がラストエンペラーの溥儀をかつぎあげた傀儡国家ではあった。中国も「満州国」が傀儡国家であることを強調するためにこのような表現にしたのであろうが、タクシーに乗り博物院の前で下りてこの看板を見た時には違和感を覚えた。

私からすれば、満州国は、日本人はほとんどの人が傀儡国家であったと認識しているのだからわざわざ「偽」の字を加えなくてもよさそうなものと思ったのだ。そのように思った理由は他にもある。中国の東北地方(南部を除く)は、古来漢民族から見れば辺境の地、異民族が住んでいた土地である。高句麗や渤海そして金という国などが興亡をくり返した。高句麗については、2004年頃だったか中国が「高句麗の歴史は、中国の一地方史である」と強弁し、韓国から猛反発を受け、この主張には無理があると悟ったのかそのうち引っ込めている。

この地方は10世紀ころにはツングース系の民族である満州族(女真族)が移り住んだ。そして瀋陽に立派な故宮を造営し、1636年に国号を「清」としたのである。そして1644年明が滅び、北京に入城し、清の時代となったのである。つまり漢民族も少しは住んでいたのであろうが、1949年まで漢民族の国はなく、むしろ彼らから見るとこの地方の民族を「胡」と呼び外国人扱いしていたわけである。

従って満州族の人たちから偽満州国と言われるなら納得するが、共産党がもし「偽」という文字をつけたのであれば、スッキリしないと言えば屁理屈であろうか。「偽」に



偽満皇宮博物院正面入り口



勤民楼

ついていろいろ述べて来たが、博物院の中がどうなっているのか見てみよう。

入口で入場券を買って中に入ったが、かなり広そうどころから見ていけばいいのか分からない。13万7千m²余り(約4万1千坪)とパンフレットには書かれている。なにしろ入ってすぐにのところに溥儀が使用していたのか、ちょっとした競馬場がある。そこを左に見ながら右奥から入っていく。すると「勤民楼」という建物の前に出た。

説明書には次のように出ている。「皇宮の主要な建物の一つ。もとは東北地方の塩の専売の役所。1932年溥儀は、偽満州国執政に就任した後、清王朝回復の大志を示すために、『天を敬い、祖に則り、政に勤め民を愛す』との清王朝の家訓により「勤民楼」と命名した。この建物は、政務、式典挙行、来賓接待、祭祀従事などの場所とした」とある。2階建てだが入口がとても印象的で、建物から飛び出すように作られ、屋根はドーム状になっている。この建物も一度見ると脳裏に焼きつくようなデザインである。この勤民楼には、満州国皇帝の玉座があり、荘厳な雰囲気包まれ、

皇帝にふさわしい場所となっている。

続いて中和門をくぐりぬけ「緝熙楼」に出る。この建物も主要な建物の一つで昔はやはり塩の専売の役所の本部だったところだ。溥儀の宮殿が間に合わずとりあえずこうした役所の建物を利用したようだ。ここは溥儀および皇后の婉容、皇妃の譚玉齡^{たんぎょくれい}の住まいだったところ。ちなみに溥儀は亡くなるまでに五人の妻を迎えている。

2階の溥儀の生活コーナーは、寝室、書斎、薬庫、仏堂などがある。彼は小さいころから体が弱くいつも薬が手放せなかった。また2階の東側に婉容が使用した寝室、客室それにアヘン中毒だった彼女にはアヘン吸引室まである。寂しい一生を送ったようだ。この建物は満州族の皇族の生活を伺うことが充分できるが、常に寂しさを感じさせる。「緝熙」(光明の意)とは、詩経の大雅編の中の文王の徳を称える詩から引用したもので、パンフレットによると、「片時も清王朝の祖業の回復を忘れず」という意味を込めて命名したとある。溥儀が心の中では清の復活を強く願っていたことがこれからも分かる。7歳の時だったとはいえずトエンペラーとなった溥儀としては、大清帝国の再興を強く願うのは当然のことだろう。

維熙楼を出て、長春門をくぐり少し歩いたところに同徳殿という名のとても貫禄のある建物が目に入ってくる。この宮殿は塩の役所ではなく日本人による設計で1938年に完成した。今まで紹介して来た建物のほとんどが1930年代の後半に完成または建築に着手しているが、まさか7～8年後にすべて明け渡すことになろうとは誰も考えなかったに違いない。同徳殿は溥儀と婉容の住居用として建てられたのだが盗聴器が仕込まれているとの疑いを持った彼はここを利用することなく終わった。映画「ラストエンペラー」で使用された天井が高く中国風のシャンデリアが美しいホールもここにある。2階建てだが黄色の屋根瓦とどっしりとした造りは皇帝用の住居らしい雰囲気



同徳殿

持っている。

建物はまだいくつもあるが、主要な建物は以上の三棟である。この博物院にはその他に1万m²の広さをもつ東御花園という日本人の園芸家の設計による庭園や溥儀が使用したであろうプールがある。そして万一戦争が起きた時のために、東御花園に隣接して地下の防空壕まである。長い階段を下りるとコンクリートで頑丈に造られた部屋を見学できる。この広大な博物院を巡って歩いていると、溥儀はここでどのような気持で日々を送っていたのだろうかと思わずにはいられない。自分の力では如何ともしがたい籠の鳥にすぎず、常に関東軍の命令下に置かれ、ただ歴史に流されていくしかない中に置かれた彼の心中はどのようなものだったのであろうか。

なお、第2次世界大戦終了後、溥儀は弟の溥傑と共にソ連軍に身柄を拘束され、ハバロフスクで一時収監された後、1950年に瀋陽近くの撫順にある戦犯管理所に収容された。そして1959年特赦により、釈放された後は、中国共産党に思想教育を強制された後、一市民として静かに余生を送った。お気の毒な生涯であったといえよう。

長春の旅は終りに近づいて来たが、最後に私がどうしても見てみたい「長春電影制片廠」に向った。長春は映画の都でもある。この制片廠(映画制作所の意)の前身は、満州映画協会、略して満映という。この満映が中国の映画の主要なルーツの一つとなり多くの映画人を輩出した。満映は満鉄の一部門でスタートし、関東軍の広報の役割をしていたが、1937年に満鉄から分離独立した。独立当初は満州国の正当性や日満親善に関する映画を作っており業績は不振が続いた。その建て直しのために迎え入れられたのが甘粕(元憲兵大尉)だった。映画「ラストエンペラー」で坂本龍一が甘粕を演じたのでご記憶の方もあろう。彼は改革を断行したが、李香蘭という名女優を発掘し、数々の主演映画をヒットさせたこと等で一気に優良会社となったのである。満映といえば甘粕理事長と李香蘭を思い起こす人が多いと思う。そのように思っていたが、先日「つたや」に行き、「李香蘭我が半生」という本があるかどうかカウンターの40歳台と覚しき女性に聞くと、「李香蘭」って何ですかと聞き返され軽いショックを受けた。もう40歳台以下の人の多くは彼女を記憶にも留めていないのかとガッカリしたのである。この二人については少し紙面を割こうと思う。

甘粕元憲兵大尉は、1923年にアナキストの大杉栄と内妻と甥の三人を憲兵隊本部に強制連行し、三人とも殺害した甘粕事件を起こしたことで有名である。軍事法廷で

禁固10年の刑を言い渡されたが、三年で出所しなぜかフランスに留学する。その費用はなぜか陸軍から出ていたという。帰国後は大連に住んでいた。満州事変前後、裏で軍と関わり、ある日突然満映の理事長になった。そして元軍人なのに満映の建て直しに才能を発揮する。改革の中で中国人スタッフの給料引き上げや中国人俳優の給料を日本人並みに引き上げることを断行した。なかなかできないことであった。彼は日本の敗戦が決った翌日、満映の事務所で服毒自殺を遂げている。盛大な葬儀が満映で行われたが、中国人だけで三千人が参列したといわれるほど中国人に慕われたという。事件を起こした甘粕と、満映で辣腕をふるった甘粕となかなか結びつかないが、何かと謎の多い人物ではあった。

次に李香蘭についてその人生をふり返ってみたい。彼女は1920年に満州の撫順で生まれた。まだ健在である。中国名で女優になったが、生粋の日本人で本名は山口淑子という。彼女の彫りの深い日本人離れした美しい容貌は世の男性を魅了せずにはおかなかった。父は佐賀県出身の中国語教師で、淑子の中国語の先生でもあり、厳しく指導したそうだ。女学校時代に瀋陽銀行総裁の李際春の養女となり「李香蘭」という名前をつけてもらった。彼女はこの名前がとても気に入ったという。名前の中国語での発音の響きがとてもよいからという。14才の時、北京に北京語の勉強のため留学もしている。そのためか、彼女の中国語はとても美しく、映画を見た中国人も彼女を中国人と疑わなかったという。

18才で初来日。「日満親善」のシンボルとなり日本でも東宝や松竹の映画にたくさん出演している。時代背景を反映した国策的な映画に美男俳優であった長谷川一夫との共演で次々とヒットを飛ばし、人気は留まるどころを知らなかった。特に有名なのが、1941年2月11日(当時紀元節)の「日劇7まわり半事件」である。その年の12月に真珠湾攻撃で日米開戦となる戦争突入必至の情勢の中、娯楽も制限されたとはいえ、「歌う李香蘭」見たさに国民が入場券を求めようと日劇のまわりを7周半も並びケガ人も出た事件である。その数約10万人だったという。

戦後は山口淑子と名乗り、映画も「暁の脱走」や「夜来香」が評判を呼んだ。そしてハリウッドに進出。彫刻家イサム・ノグチと出会い結婚、そして離婚。のち政界に転じ参議院議員となる。外交官の大鷹氏と結婚したので大鷹淑子として政治活動をしている。ざっと振り返っても華麗な、しかも波乱に富んだ人生を送って来たことがわかるであろう。

彼女の人生は、前述した「李香蘭わが半生」に詳しい。も

う20年くらい前だったと思うが、日経新聞の最終面にこれが連載されたのを読んだが、今は内容をほとんど忘れたのでこの長春市を書くに当り「ツタヤ」に行ってこの本を求めたのだ。

さて「長春電影制片廠」の入口に立ち、ここが一世を風靡した李香蘭の映画を撮っていたところなのかと感激した。しかし時の流れはすべてを遠くに押し流してしまうものだと思わずにはいられない。門番がいたのでガイドに交渉してもらったが中には入れてもらえなかった。理由はよく分からなかった。仕方なく門扉を通して中を見るとなだらかなスロープの向こうになぜか大きな白い毛沢東像が立っていた。

そのうち日はとつぷりと暮れてしまった。ガイドに夕食を付き合ってもらい、早めに長春駅の待合室で少しゆったりし、22時20分の特急寝台車に乗り大連に向った。



第2次世界大戦で日本が撤退してから吉林省の省都は再び吉林市となった。吉林省の名称は吉林市からとったものでもあろうし、長春市は、満州国の首都のイメージがあまりにも強すぎてそうだったのであろう。しかし1954年に長春市を省都とした。理由は、長春市は吉林市より遙かに近代的な街であり、行政施設も十分に揃っていたためという。その後産業基盤の整備も進み、「中国第一汽車集団公司」という従業員も10万人を超える一大自動車メーカーもここに大拠点をかまえた。たしかトヨタやマツダとも提携し、中国の自動車業界をリードしている。しかし大連に比べ、近くに港を持たない長春は今後どのように発展していくのであろうか。長春はあまりに満州国時代の街の骨格が色濃く残っており、それを払拭して一皮むけた発展をするのは容易ではないであろう。そのようなことを考えながら眠りについた。



地質宮を背に前は文化広場、左奥に尖った屋根の國務院、右前方に軍事部旧址が見える。私が一番長春らしい風景と思うところだ。

前回はヘラナシゴダ植物園とハッガラ植物園の話をしました。今回は仏教関連遺跡・世界遺産を除くと、スリランカでも屈指の観光ポイントではないかと密かに思っているペラデニヤ植物園と周辺の話をししましょう。

ペラデニヤ植物園はキャンディ中心部からコロombo方向に6.5kmほど戻った場所にあります。バスに乗れば10～15分ぐらいで植物園の正門前に着きます。スリランカ最長の川であるマハベリ川がU字型に曲がっている箇所、U字の内側ほぼ全てが植物園になっています。植物園の総面積は約70haあり4000種類以上の薬用及び鑑賞用の植物が集められています。

もともとは14世紀にキャンディ王朝によって造営された王室庭園だったものを、1821年に英国によって植物園として作り直されました。キャンディ王朝が英国によって滅ぼされたのは1815年なので、スリランカが植民地化されて直ぐにペラデニヤ植物園は出来た事になります。

正門から入って直ぐ右側にあるスパイスガーデンが園内探索のスタート地点になります。ここのスパイスガーデンは、植物園シリーズの最初に紹介した小規模なものとは違って4000本以上のスパイスが集められています。スパイスは、当初は欧州各国にとって薬用植物と考えられていたので、当植物園では薬用と分類されています。

色々とも見ものはありますが、日本人観光客に最も人気があるのはジャワビンローの大樹です。あの～木、何の木でおなじみの〇〇製作所のCMに出てくる大樹にそっくりです。本物はハワイのオアフ島にある、モアナルアガーデンズという公園にある「モンキーポッド(ねむの木)」なのですが、此処のジャワビンローは本当によく似ています。友人やお客様を案内してこの植物園に来た際に、冗談で「実は、あのコマーシャルはここで撮影されたんですよ」と言う信じる方がいるほどです。現地の方や他国の方はあの有名なCMを知らないの、何で日本人はこの大樹の前で、はしゃいだ上に記念撮影をしたがるのか不思議がっているでしょうね。

次に人気のあるのは記念樹木園です。最も古い樹木は1875年にエドワード7世によって植樹された菩提樹だそうです。1981年に日本の現天皇陛下がスリ

ランカを訪問された際に植樹された樹木もあります。植物園を訪れた各国の著名人によって植樹された樹木もたくさんあり、それぞれに記念プレートが付けられています。他にもヤシやラン・竹・シダのコレクション、大王ヤシの並木、フラワーガーデン等が広大な敷地内に点在していて見どころ満載です。

入場料は94年版では大人がRs.50 (Rs=スリランカルピー) 子供と学生がRs.25、車がRs.25になっています。思い出してみると初めてペラデニヤ植物園を訪れた時は車に乗ったままで園内を1周出来たので楽ちんでしたね。02年版では大人がRs.150、子供と学生はRs.75、車はRs.65です。ところが11年版では大幅に値上がりして大人Rs.600、子供と学生Rs.300になり、車の乗り入れは出来なくなったようです。内戦後の物価高騰がここにも表れています。この植物園はキャンディ周辺の若者たちの恰好のデートスポットだっただけに、この大幅値上げは影響大でしょうね。

植物園の周囲に目を移してみると、南側にはスリランカで一番古い(1942年設立)大学のペラデニヤ大学があります。1942年設立で最古というのは意外と思われるでしょう。英国の植民地時代にはスリランカ国立の大学は設立出来なかったからです。

コロombo大学はペラデニヤ大学よりは歴史が古いのですが、ロンドン大学の分校として設立されたので、スリランカの人達からはスリランカ固有の最古の大学としては認められていません。第2次世界大戦中の1941年に英国は大戦の終結後にスリランカが独立することを約束しました。教育関係者達は喜んで初の国立大学設立の準備を始め、その翌年にはペラデニヤ大学が設立されたのです。

構内には植民地時代の建物が今でも数多く残されて重厚な雰囲気が残されています。古いだけでなく、日本の無償援助事業で新しい歯学部棟が建設されたりして近代化も進められています。学術の熟成度、入学試験の難易度もコロombo大学と並んで最高ランクにあります。

スリランカでは中学生に対して行われるO (ordinary) レベル試験で最初のふるいにかかけられ、さらに高校生に対して行われるA (advance) レベル試験で大学受験資格を得ることが出来ます。Oレベル試験

で上位に入らないと普通高校には進学できないので、この時点である程度将来が決まってしまう。更に普通高校に行ってもAレベル試験に備えて塾通いするのが常です。Aレベル試験の上位者にペラデニヤ大学やコロombo大学の受験資格が与えられます。スリランカの学歴偏重主義は日本以上ですよ。

植物園正門の道路向かいには、僕がこのエリアで最良にしているペラデニヤレストハウスがあります。ここでのお勧めは、生ビールとチキンブリヤーニですね。ヌワラエリアが近いので美味しい生ビールがいつでも用意されていて、道路越しに見える植物園の緑を眺め

ながら飲む生ビールの味は格別です。そして食事兼オツマミとして最高なのがチキンブリヤーニです。

よく洗ったお米に、鶏肉を各種スパイスと玉ねぎで炒めカレー味に味付けしたものを加えて、チキンストックで炊きあげた米料理です。レストランによって味付けは様々ですが、この店のものは味付けが濃くて僕好みの一品です。本当に美味しいですよ。他にはカシウナッツをレッドチリで炒めたデヴィルナッツもいけますね。折角キャンディにいらした方は、植物園に寄る時間がなくても、コロomboへの帰り道に寄り道してでも食べてみる価値があると、僕は断言しますね。

読む(番外)

日本という国で子育てをすること

真中智子

外国人先輩ママの体験談を聴きに言った。知人に誘われて行ったが、思いがけず一人の発表に泣きそうになってしまった。

Aさん。就学前の子どもを連れて中国から来日。Aさん夫妻は共働きのため、保育園に入所申請をするが、「子どもが日本語を話せない」という理由で断られ、今でも悔しい思いがするという。誰も預けられる人のいない異国の地で、Aさんは、子どもを1人で留守番させ、後ろ髪を引かれる思いで仕事に向かった。(「今考えても、危なかった」とAさんは述懐している。) 息子は何も話さなくなった。このままではいけないと、Aさん夫妻は一大決心をする。中国に息子1人だけ帰したのだ。子どもを中国に置いて別れるとき、日頃、言葉と話さない息子が、「お母さん! お母さん!」と叫ぶ声が、今でも耳元で聞こえるとAさんは語った。(思わず、泣きそうになる。聴衆一同が、シーンとした)

この決断は辛くも正しかった。息子はめきめきと中国語を覚え、友達もでき、澆刺としてきた。安心した両親は、すでに小学生になっていた子どもを日本へ呼

び戻す。しかし、彼の受難はさらに続く。すっかり忘れた日本語でのコミュニケーションができず、また授業の進め方も中国とはまったく異なる。当然、クラスには馴染めず、学校でのトラブルも多かった。

小さかった息子も、大学生になった。日本にも帰化したという。ここで体験談は終了したが、思わず手を挙げて質問する。「息子さんは、大変な体験をされたけれども、今それらをどのように感じていらっしゃいますか?」。返ってきた答えはしんどいものだった。

「息子は、日本人の友達もいるし、日本のことが大好きです。でも、帰化するのを勧めたとき、とても嫌がった。帰化すれば、自分が今まで戦ってきた意味がなくなると」。

日本社会は、彼にとって戦いの場だった。帰化をすれば、その日本社会に自分が組み込まれてしまう。とてつもない葛藤が、彼を襲ったことだろう。そしてそれは今でも続いているのかもしれない。

「戦ってきた意味がなくなる」と彼に言わせたすべてのものに、本当の意味で勝つために、どうか最高に幸せになってほしい。

【‘わりい’の原稿を募集しています】

‘わりい’は、原則として、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。

主として、会員と関係者の皆さんの原稿でまとめられています。中国で体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなどを気楽にお寄せ下さい。

- * 紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたりすることもあります
- * ‘わりい’に掲載の記事などについても簡単な感想をお寄せいただければ有難く存じます。

日中文化交流市民サークル ‘わりい’

私は数ヶ月に1回ではあるけれど、ケニアの両親と電話で話すようにしている。

農村に住む農家の両親は常にあれこれと忙しそうだ。それも自分たちの用事でないことで忙しい。農村での生活は基本的に、すべては自分たちでやるDIY (do it yourself) 方式で、電話一つで来てくれる便利な個人や業者など存在していないから、家畜が病気になったり、農作業の人手が足りない、水がない、牛のミルクの出が悪い、赤ちゃんが生まれてお母さんの家事が出来ない、屋根の修理、街までの買い物、日常のすべての「困りごと」をやる人に頼むことになる。

そんな「頼まれごと」で日常がとても忙しい両親は、いつ携帯電話をかけても、どこかしらの家で何かをしている。最後の子供(女の子で高校生)以外は、全員実家を出てしまった後の両親は、今まで受けてきたいろいろな頼みごとのお返しをするかのように頼まれごとをこなす日々だ。

8人の子供を育てた義母は、免許こそないが日本でいうところの「助産師」のように、農村で生まれる赤ちゃんを取り上げることもしばしば。お母さんが忙しい時や、病気のお母さんの子供を預かっていることもある。

義父は、人のうちの農作業や水汲み、薪拾い、留守宅の家畜のえさやりなど肉体労働を中心によくやっている。そして決まって、日曜日には地元の教会で、聖歌隊の一員として賛美歌を歌う。

まさに義父母の生活は、人の頼まれごとで始まり、頼まれごとで終わる一週間、一ヶ月、一年。そしてきっと一生涯なのだろう。

私がケニアにいたときは、夜中に出て行く義父の姿があった。聞けば、「体調が悪くなった友人の代わりに、ガンソリンスタンドの仕事に行ってくる」という。「え～」と驚く私に「病気だからね、仕方がないね」と笑う。職場もいきなり違う人が来て大丈夫なのだろうか 私には数ヶ月に1回ではあるけれど、ケニアの両親と電話で話すようにしている。

農村に住む農家の両親は常にあれこれと忙しそうだ。それも自分たちの用事でないことで忙しい。農村での生活は基本的に、すべては自分たちでやるDIY (do it yourself) 方式で、電話一つで来てくれる便利な個人や業者など存在していないから、家畜が病気になったり、農作業の人手が足りない、水がない、牛のミルクの出が悪い、赤ちゃんが生まれてお母さんの家事が出来ない、屋根の修理、街までの買い物、日常のすべての「困りごと」をやる人に頼むことになる。

そんな「頼まれごと」で日常がとても忙しい両親は、いつ携帯電話をかけても、どこかしらの家で何かをしている。最後の子供(女の子で高校生)以外は、全員実家を出てしまった後の両親は、今まで受けてきたいろいろな頼みごとのお返しをするかのように頼まれごとをこなす日々だ。

8人の子供を育てた義母は、免許こそないが日本でいうところの「助産師」のように、農村で生まれる赤ちゃんを取り上げることもしばしば。お母さんが忙しい時や、病気のお母さ



んの子供を預かっていることもある。

義父は、人のうちの農作業や水汲み、薪拾い、留守宅の家畜のえさやりなど肉体労働を中心によくやっている。そして決まって、日曜日には地元の教会で、聖歌隊の一員として賛美歌を歌う。

まさに義父母の生活は、人の頼まれごとで始まり、頼まれごとで終わる一週間、一ヶ月、一年。そしてきっと一生涯なのだろう。

私がケニアにいたときは、夜中に出て行く義父の姿があった。聞けば、「体調が悪くなった友人の代わりに、ガンソリンスタンドの仕事に行ってくる」という。「え～」と驚く私に「病気だからね、仕方がないね」と笑う。職場もいきなり違う人が来て大丈夫なのだろうかと心配したが、「何が問題?」といった義父の表情だ。

ケニアの両親の電話の向こうから聞こえるいろいろな生活音。かなづちを叩く音、牛が鳴く声、子供の声の裏で頼まれごとをする両親の姿が想像できる。人に頼み、人に頼まれ、そんな風に毎日が進んでいく農村の生活が伝わってくるようだ。

両親はよく私が夫の実家に泊まりに行く度、「もっと周りの人にやってもらいなさいね」とよく言う。「あなたは自分でやりすぎよ」とも言う。畑から帰って泥の付いた靴を玄関に置いておくといつの間にか誰かに洗われていてそっと置かれている。バス停まで行くときは、近所の子供が必ず付いてきて、荷物を運んでくれる。畑から収穫してきた豆の皮むきをやる時は、いつのまにか回りに沢山のお母さんが来て一緒に剥いている。

当然、逆に頼まれることも沢山ある。いきなり泣いている子供を渡されて、「今から用事があるからよろしくね」と去っていくお母さん。「牛のミルク、頂戴ね」と空き瓶持参でやってきて、ひとの家の牛のミルクを絞っていくお母さん。「遊んで遊んで」とこちらの都合にはお構いなしにやって来る子供達。そして「ありがとう」と誰もいちいち言わない。あまりにも「当たり前のこと」だからだ。

そんな風にケニアでは、「どこまで人に頼んでいいのか」よく悩んだ。日本では、「どこまで人に頼んではいけないのか」でたまに悩んでしまう。

◇わんりい活動報告

生チョコとクッキー・3種 講師：足立晃一氏

日時：2012年3月22日(金)

場所：まちだ中央公民館・調理実習室

参加者：14名



焼きあがって、お土産用に配分したクッキーの前で記念撮影。中央男性が、足立晃一氏。立っている人の左から2人目は林敏さん右から3人目・朱エンロさん、4人目・劉ゲイシンさん。劉麗那さんは早目に帰宅。

講師の足立晃一さんは、長年のお菓子作りに関わって来られましたが、今は退職されて出身地である茨城県の鉾田市に戻っています。田井の山友達でもあることから‘わんりい’会員として会の催しにもお付き合いいただき、‘わんりい’の何かの集まりの折々に、届けられた美味しい手作りの生チョコやクッキーを皆で賞味してきました。

クッキーは気軽に焼かれる方が沢山ありますが、やはりプロの息のかかった味わいはどこか一味違うということで、2010年、足立氏を講師に迎え、会員同士の交流目的に「生チョコとクッキーの会」を開催しました。

その後、‘わんりい’のお菓子作りの名手・有為楠女士が会のイベントの折に何回か焼いてくださっていたのですが、女士曰く「自分で焼いたのは微妙に味が違う」ということで、氏に再度の指導をお願いし、今回の「生チョコとクッキーの会」開催になりました。

今回も、前回同様に‘わんりい’会員の交流会として開催。足立氏と一緒に生チョコやクッキー3種を作り、お昼は、田井手作りの‘ビーフ&トマトのシチュー’を皆さんに召し上がって頂いた後、デザートに、コーヒーと焼きあがったばかりのクッキーと、生チョコを楽しみました。

特に作り立ての生チョコは、口に入れた瞬間に、チョコと生クリームと高級ブランデーの香りが混ざり合った、豪華な味わいが口の中に広がり正に口福の一瞬でした。おまけは足立氏が持参の、鉾田産の摘み立て苳で、格別な苳の

味わいでした。

‘わんりい’の催しとしては珍しく男性の姿がなかったのですが、揚琴演奏の林敏さん、国士館大学3年生の劉麗那さん、4年生の朱エンロさんと劉ゲイシンさんが参加くださって、和気あいあいとお菓子作りを楽しみました。

できれば、次回はバレンタインの前に開催が皆さんの希望です。

(報告：田井)



国士館大学4年生の朱さんと劉さん

挑戦してみよう!

★サブレ-菊型 (フランス人フィリップ氏のレシピ)

【材料】

- 無塩バター250g
- 上白糖375g
- 全卵2個
- 卵黄1個
- 薄力粉625g
- 牛乳24 ml
- アーモンドパウダー125g
- ベーキングパウダー4g
- スライスアーモンド(飾り用).....少々

【作り方】

- ①薄力粉、ベーキングパウダーを合わせて2回ふるう。
- ②ボールに室温に戻したバターを入れ、砂糖をいれ混ぜ、全卵、卵黄、牛乳、ふるったアーモンドパウダーの順で入れ、更に薄力粉、ベーキングパウダーを加える。手で押し付けるようにしながら、生地をまとめる。生地は、ひとかたまりにしてラップで包み冷蔵庫で30分寝かせる。
- ③生地を厚さ5～7mmにのばし、菊型で抜く。
- ④抜いた菊型に卵黄をぬり塗り、スライスしたアーモンドを付けて180℃で12分間加熱し、焼きあがったら、サブレが崩れないよう天板の上で冷やす。



サクサクした歯触りが美味しいクッキーです。しっかりとブラウン色になるまで焼きましょう!

翌日も再び山に登って過ごした。

大草原の真ん中に突然ポカンと湧いて出てきたような塔公の町の片側は、半円をそれぞれ神様の名がついた山で囲まれていた。

標高の高い土地である塔公の山に樹木は生えず、遠目にみれば芝生につつまれたような緑の山肌は峰々の尾根の連なりがハッキリ見て取れた。あの稜線を伝って歩けば、一筆書きのように塔公一帯の全ての峰の山頂に立てるのだと、昨日の帰り道でそれに気付いた私は、もう翌日の登山計画を胸の中で温め始めていたのだ。

前日、結局すっかり辺りが暗くなってから塔公の町まで戻った私は、夕食がとりたくて再び小さな町の中を歩いたが、日が暮れるとサッサと店仕舞してしまっただけの町並みはどの建物もぴたりと扉を閉ざし、通りはすでに真っ暗だった。唯一開いていたのは最初に入った汚く寂れた不味い麺屋一軒のみだ。あ～あ、また此処かあ～・・・吐息をついて店に入り、他のメニューなど存在しないようなその店で、また朝と同じ麺を食べた。

それでも空腹は最大の調味料だ。この日一日、朝の麺とお婆さんの家で硬いチベット・パンを半欠けかじっただけで山道を歩き続けていた私は、あまり味の感じられないスープに浸った麺もそれなりに味わうと、このまま宿に戻ってしまうのは物足りない気分だった。

残り少ない旅の夜が惜しいのと、まだ胸の中に燻っていた塔公の町への未練の気持ちで、もう少し町の中を歩いてみたかったが、街灯も無い暗い町の中を異国の女が一人で歩き回るのは賢明な行為とは思えない。大人しく部屋に帰ろうと宿に戻ると、門の前の道端にいつの間にか串焼屋の屋台が店を出して、小さな明かりを灯していた。これまで訪れた四川の街の何処でも見られた、おなじみの串焼き屋台だ。ああ！ やっぱりこの町にもあったんだ～！

店の規模はこれまでで一番小さく、焼かれている串の種類も乏しかったが、薄暗い蝋燭の灯に引き寄せられるように木のベンチに座り、数本の串焼きを食べた。無表情なチベット服の女性が黙って焼いてくれた肉はちょっぴりしょっぱ過ぎて、あまり美味しくは無かつ



チベット草原のど真ん中に建つ塔公寺(ラガン・ゴンパ)の裏は小高い丘になっていて一面に白いダルシンというのほりのような祈禱旗がはためく。(2004年)

撮影：佐々木真理子

たが、それでもこうして塔公の夜の町にただずんでいられる事を喜びながら、昼間の出来事を反芻していると、夜の暗闇の中からのっそりと全身を完全なチベット服姿に身を包んだ男が馬を引いて現れ、私の隣に黙って座った。もしかしたら、この店の女主人の夫だろうか？

私がこの町を訪れる目的だった憧れの遊牧民、カムパ中のカムパが不意に目の前に現れたのだ。思わずドキドキしながら男の所作を見つめる私など、男の視界にはまるで存在していないようだった。大柄な体軀を日本の着物に丹前を羽織ったような民族衣装に身を包み、長い髪を頭の回りに巻き上げてゴツゴツしたアクセサリーを身につけた男は、まるで戦国時代の武者のようだ。こんなに完全なチベット服姿の男は理塘でも見かけなかった。薄暗い蝋燭の灯に照らされて目の前にうかぶ人影が現実のように思われず、まるで時間がタイムスリップした世界にいるような気分になった。やはり塔公は不思議な町だった。

この日の朝も、私にとっては唯一の食堂である麺屋で朝食をとり、再び町外れの山すそから尾根に登った私は、誰にも会う事のない細い尾根道を一日中歩きつづけた。山の要所要所にはタルチョやチョルテンといった神様の気配を感じさせるものが目を引き、この塔公にやって来てからは、常に神の存在が意識させら

れる。360度の地平線が見渡せる絶景を楽しみながら、淡々とアップダウンを繰り返す細い尾根道をたどり、無心に歩き続けるのは気持ちが良かった。

麓からは見えなかった地平線の向こうに連なる白い峰々。まるで箱庭のように見える塔公の町。天を突いて聳える雅拉(ジャーラー)神山。草原を横切る一本道を辿れば、その先は八美(バーメイ)に向うはずだ。

昨日のお寺で会ったおじさんは、この土地の人間が亡くなれば八美に行くのだと言っていた。それはつまり、八美にも鳥葬場があるという意味だろう。

行ってみたいなあ・・・理塘で目にした鳥葬の印象はあまりに強烈だった。自然から与えられた生命は役割が終われば自然に還っていく…。その弔いの形に強く惹きつけられるものを感じていた私は、他の土地での鳥葬の様子も見てみたかった。道の消えていく方向の景色に目を凝らし、どこかに立ち昇っている鳥葬場の煙が見えないかと、見える筈の無い八美の町を探した。もっともっと時間があればいいのに・・・私の残されたピサの日数は既にあと一週間のカウントダウンに入っていた。

この土地を出れば、後は康定を經由して真っ直ぐ成都まで戻り、一月前に捨ててしまったチケットの代わりとなる日本へ帰る航空券の手配などをしなければならぬ。塔公は事実上、この旅の最後の土地となるのだ。天空の大草原を思う存分に目に焼き付け、旅の間中ずっと自分を守り続けてもらった、それぞれの峰に鎮座するチベットの神々に挨拶して回ったような一日は、この旅の終わりに相応しいように思われ、私の気持ちは切なくも穏やかな満足感に包まれていた。

そろそろ夕刻の近づく頃、一帯の尾根道をぐるりと円を描いて歩いて戻り、最後に町の裏にある低い山の斜面の中腹から町を見下ろし歩いていると、眼下では大勢の少年僧達が赤い僧衣をたくし上げ、広場でサッカーに興じているのが見えた。彼らの楽しそうな歓声が、私のいる場所まで風によって聞こえてくる。

ふと、稻城からの帰り道に立ち寄った寺で会った少年僧が思い出された。此処にいる彼らもやはり、生涯仏の道に仕えるために家族と別れて来ているのだろうか？ その姿はまるで下界の学生達が放課後に仲間と遊んでいるのと、なんら変わりなく思えた。仏と共に生きるのが普通の事であるこの世界では、僧となる事はもしかしたら然程特別な事ではないのかも知れない。やっぱり彼らとて普通の少年なんだ・・・聞こえてくる楽しげな少年僧の声に、一日中すれ違う人も



塔公寺(ラガン・ゴンパ)青空に極彩色が映える。



塔公寺の裏山の向こうに真っ白な雅拉(ジャーラー)神山(主峰5820m)が聳える。

無く高原の空の風に吹かれて過ごしていた私は、何となく胸の中が温まるような気持ちとなり自然に笑みがこぼれてきた。

町ではやる事が見つからず山に登ってばかりいた塔公だが、私はまだこの町を去ろうという気持ちになれずにいた。明るい高原の爽やかな空気に吹かれ、神の存在が身近に感じられるこの土地が心地よく感じられて、何だか立去りがたい気持ちになっていた。

3日目の朝も相変わらずいつもの麺屋で朝食を取り、今日をどう過ごすか考えながら宿に戻ると、入り口で出会った宿の主人に「きょうは何処に行くんだい？」と声をかけられた。これといった予定も無い私が「まだ判らない」と答えると、主人は嬉しそうに「だったらお寺に行くといい。今日はこれが見られるよ」と両腕を前に突き出して手のひらを滑らせながら打ち鳴らす動作をして見せた。

それが何の事なのか、主人の説明では解らなかったが、とにかく今日は塔公寺で何かが行われるらしい。町ではする事が見つからず、付近の山も歩きつくしてしまった私に、今日の目的地が出来た事は大歓迎だ。主人の笑顔から何か楽しい事が行われるように思わ

れ、それは見逃しちゃならないといそいそと出かける支度を整えた私は、町の外れにあるお寺に向かい入場料の10元を支払って門を潜った。

この塔公寺(ラガン・ゴンパ)は一月前にも当初の旅メンバーと訪れていた。真っ青な空の下、塔公のシンボルであるダンシルの林立する神山を背景に従えたお寺は、7世紀頃から伝わるチベット仏教サキャ派の、この中国チベットエリア内でも特に格式の高いお寺なのだという。

宿の主人の口ぶりから、お祭りでも行われているのかと期待していたが、境内は特に何かが用意されている様子もなく、人が集まっている訳でもない。何だか拍子抜けしながらも、前回は大勢でゾロゾロと流して見た境内を、時間をかけてゆっくりと廻った。本堂は真ん中が吹き抜けの二階建てになっていて二階の回廊から階下を眺め下ろす事もできた。なるほどこれまで見てきた中でも一番立派な造りのお寺だ。

私が二階の手すりにもたれボンヤリしていると、廊下を歩いてきた僧侶が笑顔で声をかけてきた。「君は日本人かい? いい日に来たね。今日はこれがあるから面白いよ」

そう言いながら、僧侶も宿の主人と同じように、両手を前に出し手のひらを滑らせるように打ち鳴らして見せた。

いったいその動作は何の意味だろう? 僧侶に尋ねても拙い中国語しか話せない私には、返ってくる言葉の意味が解らない。それでも特に変わった様子も見られないお寺にちょっぴり落ちていたテンションが、やはり何か面白い事が行われるのだと確かめられた事で再び跳ね上がり、それはいつ始まるのか尋ねるとあと2時間後位だという。

なんだ~、ちょっと早く来過ぎたんだ。一旦寺を出て時間を潰す事も考えたが、旅のラストスパート期に入り懐事情がかなり切迫している私には、お寺の入場料さえ惜しかった。寺を出たところで、特にやりたい事がある訳でもなく、のんびりその時間が来るまでお寺で待つ事にした私は、改めてゆっくりとお寺の壁に描かれた六道輪廻の地獄の様子を興味深くシゲシゲと眺めたり、寺の天井に描かれた模様に関心したりして過ごした。

表に出れば本堂の横に設えられた観音殿では、チベットエリアで一番大きい観音像とされる、美しい千手観音が祀られている。これまでもこの東カム地方のチベット・ゴンパで様々な仏像を拝んできたが、この塔公寺の千手観音はとりわけ大きく、美しく装飾さ

れて、思わずハッと目を引く存在感が感じられる。それ故チベット族の人々からも特に深い信仰を集めているのか、観音殿の入り口では何人もの巡礼者のような人達が熱心に五体投地を繰り返している姿も見られ、そんな彼らの様子を眺めていると、そこで巡礼者の様子をスケッチブックに描いていた一人の青年から話しかけられた。

ヨレヨレのシャツとズボン姿の、チベット族とは少し違った風体の彼に話を聞けば、その青年は上海からやって来た中国人で、チベット仏教に憧憬の念を持ち、放浪の旅をしながらチベットの寺を巡礼して回っているのだという。中国の漢民族にもそんな人がいるんだな・・・と意外に思われた。やはり何処の国の国民でも色んな人がいるものだ。

時間をかけてゆっくり観音堂を御参りしてもまだ時間が余っている。所在無く寺の境内を歩き回っていると、先ほど本殿で声をかけられた愛想の良い僧侶に再び出会った。

「やあ、君か。何をしてるんだい?」

「これが始まるのを待っているの。」

私はその意味が解らないままに、宿の主人や先ほどの僧侶の仕草を真似て、両手のひらを滑らせながら打って見せた。すると僧侶は言った。

「始まるまでにはまだだいぶ時間があるよ。それまで私の部屋に遊びに来ないかい?」

ええ??? お坊さんの部屋にい~!?

僧侶のあまりに気さくで意外すぎる申し出に、驚いた私は一瞬躊躇しながら忙しく思考を廻らせた。いくら相手がお坊さんとはいえ、一人で気軽に見知らぬ男性の部屋について行くなんて如何なものなの...???

だが、何かが始まるまでの長い待ち時間には、やや時間を持て余し退屈していたところだし、それより何より何か面白そうな事があれば、首を突っ込まずにいられない私だ。なんと言っても相手は僧侶で、ここはお寺の境内だし危険な事などある訳がない。

「お部屋は何処にあるんですか?」

「あそこだよ」

僧侶が指差したのは、寺の境内の建物の一角だ。

「ええ、お邪魔します」

そうして私は先に立って歩く僧侶の後について歩き始めた。

(次号に続く)



◆わんりいの催し

第8回 中国語で読む・漢詩の会

- ▲日本でよく知られている漢詩を、中国語の音とリズムで楽しもう!
- ▲正しい発音で読めるように練習しよう!
- ✿ 8回目の漢詩の会は、3月のテキスト、「望廬山瀑布」(李白)、「江南春」(杜牧)、「春暁」(孟浩然)、「春雪」(韓愈)、「楓橋夜泊」(張継)の読みに徹します。
- ✿ 漢詩は音楽です。中国語を学んでいらっしやらない方も、是非!



- 場所：まちだ中央公民館 6F・視聴覚室
町田市原町田6-8-1
JR 横浜線町田駅ルミネ口2分/小田急線南口5分
- 期日：2012年4月8日(日)
- 時間：10:00～11:30
◆ 5月の予定は5月20日(日)
□ 場所…視聴覚室
□ 時間…13:30～15:00の予定です。
- 会費：1500円 ■ 定員：20名
* 録音機をお持ちの方はご持参下さい。
- ◆ お申込み&問合せ(有為楠)：☎050-1531-8622
E-mail: ukiuki65jpp@yahoo.co.jp

【植田渥雄先生略歴】

- 1937年、岡山市生まれ。東京大学文学部卒業。
- ▶ 元桜美林大学教授
- ▶ 元NHK ラジオ中国語講座担当講師
- ▶ 現桜美林大学孔子学院講師
- ▶ 現桜美林大学名誉教授

姜小青コンサート

古箏が奏でるきらめきの旋律

古箏の名手・姜小青さんが奏でる古箏の華やかな音色とバラエティに富んだ曲目をお楽しみください。

- 2012年5月11日(金)
- 開演：19:00(開場→18:30)
- 会場：東京文化会館小ホール
(JR上野駅・公園口前)
- 出演：姜小青(古箏)、
西本梨江(ピアノ)、
馬平(中国木琴・打楽器)
- 予定曲：心願、陽関三疊(古曲)、
戦台風、剣の舞 他
- 料金：¥4,500(全席指定)
- ◆ 主催：(財)民主音楽協会(民音)
- ◆ 問合せ：080-1304-7347(村山)



'わんりい' は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしくお願ひします。尚、新年度の会費の納入は、出来るだけ4月一杯にお願ひします。また、新入会を歓迎します。

年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011 'わんりい'

'わんりい'の名は、'万里'の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報'わんりい'を発行し、情報の交換に努めています。'わんりい'の活動の様子は、おたより又は'わんりい'HPでご覧ください。

入会されると
①年10回おたよりをお送りします。
②'わんりい'の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

- ◆ インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい'わんりい'をpdfファイルでお送りします。こちらは無料です。
- ◆ 町田国際交流センターで、ご自由に取ることが出来ます

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に'わんりい'の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

◆わんりいの催し

〈スリランカ・カレー料理の会〉

スリランカはインド真下の、インド洋に浮かぶ、美味しい紅茶で知られた国です。スリランカ人講師が、インドカレーと一味違う、本格派スリランカカレーの代表的なカレー料理3種を紹介くださいます。さて、インドカレーとどこが違うのでしょうか？



▶日時：2012年4月13日(金) 10:30～14:00

▶場所：まちだ中央公民館・調理実習室

〒194-0013 町田市原町田6-8-1 町田109・6F
JR横浜線町田駅ルミネ口徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩5分

▶会費：1500円～2000円(講師謝礼・会場使用料・材料費など)

▶定員：15名～20名(定員になり次第締め切ります)

講師からスリランカのお話を伺いながら作った料理を楽しみましょう！

▶持ち物：エプロン・筆記用具

●申込み：わんりい ☎042-734-5100
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

●講習予定料理

1.スリランカ・カレー3種

- ①フィッシュカレー
- ②ダール(豆)カレー
- ③野菜カレー

2.スリランカ風サラダ&デザート

(デザートとスリランカ紅茶付き)

日中友好40周年記念

林敏 揚琴リサイタル

シルクロードで生まれた中国古楽器《揚琴》。ギター、コントラバス、ピアノとの国境を越えたアンサンブル。

●2012年5月18日19:00開演(18:30開場)

●ミュージアムシンフォニーホール・音楽工房市民交流室

●3000円 全席自由

●出演：林敏/揚琴

竹内永和/ギター

田中伸司/コントラバス

萩森英明/ピアノ



●主催：林敏後援会

●後援：「音楽のまちかわさき」推進協議会

●問合せ：林敏後援会：☎044-951-6736

☎090-9238-3021

林敏さんの華麗な揚琴の音色を楽しもう！

'わんりい' 田井がチケットをお預かりしています。お会いできる機会のある方はこちらへのお申し込みもできます。

☎042-734-5100 (わんりい)

山下孝之 ケーナライブ

ここ何年間かの「あさおサークル祭」の催しや、昨年12月の町田市地域支援事業「つながろう！広がろう地域」の「輪」と「和」などで、ケーナの演奏を披露くだるなど、「わんりい」の活動に関わって下さっている山下孝之さんが、今回、ケーナのライブを計画されました。ケーナの音色を生かしたオリジナル曲を多数を作曲しており、江ノ電全線開通100周年記念・公募作品「好きです江ノ電」作曲部門で最優秀賞を受賞しています。



●2012年5月3日(祭)

●町田 Beat Box Cafe

町田駅北口徒歩8分

町田市中町3-5-6

☎042-720-2305

●開演：19:00(18:00開場)

●2500円(1ドリンクつき)

●ゲスト:大久保 宙(パーカッション)

●問合せ&予約：090-7729-1335(山下)



[4月の定例会]

◆定例会：4月10日(火) 13:30～(田井宅)

◆おたより発送日：2012年5月2日(水)です。

～どちらも、お問合せの上で自由に参加下さい～